

翻刻 役者更紗目鏡

佐藤 敏江（中央図書館）

はじめに

底本は大阪府立中之島図書館蔵（九七一／一六四）黒表紙 二冊（十三×一八.五cm） 台簽の書名「役者更紗眼鏡」、内題「役者更紗目鏡」、序文は二丁、本文は各三二丁、本文末に文政三年（二八二〇）五文舎一笑写とあり、**四明荘** **豊前別中津濱田氏蔵書**の印がある

三代目中村歌右衛門と二代目嵐吉三郎のライバル関係は、一八世紀後半から一九世紀前半の大坂の歌舞伎の黄金期を現出する要因となった。二人の役者とそのファンの存在が、演劇界を始め、多くの出版物や役者グッズ等文化・風俗・経済活動など多方面に影響を与えた。本書はそうした資料の一つで。冒頭に大坂住居大哥舞妓役者衆中平日行状とある様に、当時の大坂在住の大歌舞伎で活躍する役者の平生の生活を中心に、芸評、人物評を役者評判記仕立てで書上げ、一見華やかな役者の世界の内実、素顔が覗けるファン必見の珍しい作品となっている。

凡例

本文は底本の忠実な翻刻を原則としたが、通読の便を考慮して返り点、句読点を施した。底本にある旧字体はそのままとしたが、一部活字のない物は通行の字体とした。

底本にある振り仮名はすべてそのままとした。

活字のない特殊な合字・異体字・連字体は通行の字体に改めた。

各丁の終わりに「」を付した。

底本が虫損により、判読困難な場合は圏で、判読が可能な場合は「」で示した。

反復記号「レ」「ニ」「ク」は底本のままで表示した。

本分中の紋・図は、**紋・図**、或は図の説明文を付した。（例）**青海波図**

白抜き文字は、該当部分の下に（白ヌキ）と表示した。（例）上上吉（三文字白ヌキ）

(1) 役者更紗目鏡

大阪巻

二冊之内」

見たいなく、芳野の桜よりも人の見たがる芝居の楽屋、さわきぬれ事、「む」ほん人道外、
〔荒〕事、舞台にかへる内の気質、二の替り、新狂言趣向のよしあし夫よりも、聞く嬉しき平日乃
行状、正月二日に本出しの、例年の評書かと、ちよつと覗けばこりや珍しい更紗目鏡」

○當世は裏の裏行楽屋口から出這入する役者衆中の褒貶會

月花餘情色人卦などの粹書には、所謂妓婦哥技乃内證はなし、手管の穴を著せしも、いまた俳
優家の癖を記せし書といへども漸楽屋方言田舎芝居のミ也。夫さへ十返舎一九が膝栗毛乃糟粕
を掌た顔すれと趣向古し。ここに戯れに著すへ、八文舎の評團に准え初めに役者衆中の目録見
團圓こし附、位はうがつて数穆乃名目を冠らしむ。是しも眠獅撰などの糟粕よと笑へど笑へ、四
方乃山々蒼の梅も笑ひを含み、初春の筆初目出度尽し乃歳旦、春興も雅人の耳をよるこはす程
の趣向もなく、風雅でもなく洒落でなく、しやうことなしの此帖、凝つて八思案にあたわずと、初
團乃途中庚申の日乃雪乃帰るサ、風團圓ひ出る俣をはなし乃かわりに團附るも、楽屋を見ざる
人々の常に聞ざる事共をいわざるゝそよけれども、又いわで過んもいかゞとて、年酒から梯子し
て雪をばしのぐ傘の下、またく、夫から立寄た。酔中のむだ言。 五文舎一笑」

大坂住居大哥舞妓役者衆中平日行状 戯品定

○見立芝居に持扱ふもの左のことし

▲惣巻頭

大丈夫 片岡仁左衛門 道頓堀北側

當時座頭乃名は 通り札

▲立役之部

勇氣 市川蝦十郎 布袋町

團圓ぶりハリつばな 一枚看板

古風 中山新九郎 太左衛門はし

美(艶)香の仕にせは 大坂名代

當世 嵐三五郎

大西の芝居へおりた ならく

天然 市川団蔵

小がらでも親の名を 縫足

余風	坂東重太郎	ぬしや丁
	鬢附やの狂言を	似顔画
為功	中山文七	太左衛門はし
	どふしてもやわらかな	ふたい蝋燭
律儀	嵐猪三郎	南たまや丁
	圍質へきつしりとした	西場凶帳
出世	浅尾勇治郎	御前町
	しばらく乃間に	勢り上ケ
奇麗	小川吉太郎	道頓堀北がハ
	やつし役ハよふうつる	鏡臺
若半	中山一蝶	新九郎同居
	とり廻りハしやんとした	上下上ケ
大様	中村歌七	南かさや丁
	芝翫丈に内縁を	引象
追号	「富士松山十郎」	
同	中山小三郎	
同	市川市羆	九郎衛門丁
同	大谷此友	大谷同居
同	嵐璃三郎	新川
同	片岡十蔵	
同	中山新平	
同	嵐寫三郎	當時江戸
同	市川濱蔵	なんち
同	三桝亀五郎	同
同	坂東荒太郎	生玉
同	小川又九郎	長丁
▲実悪敵役之部		
巧者	浅尾工左衛門	ほてい丁
	がく屋でポンくといふ	鍬鉋
強気	大谷友右衛門	ほてい丁

懐口が大きに見ゆる

鼻紙板

目アリ

出情(白ヌキ) 嵐冠十郎

同丁

江戸ふうて大きな

紋板

世話 浅尾國五郎

なんち

頭圍がわりにあちこち

立廻り

師風 浅尾為十郎

當時江戸

ぶたいハ賑ハしぬ

騒キ哥

可笑 嵐團八

きくや丁

ぶたいと地とは

早替り

追号 片岡小六郎

九郎右衛門丁

同 桐山紋治

同

同 坂東國五郎

なんち

同 片岡蝶十郎

ほてい丁

同 桐寫儀左衛門

新川

同 浅尾此兵衛

高津新地

同 小川馬右衛門

同 大谷鳴右衛門

すみや丁

同 嵐岡十郎

風雅 嵐小六

道とんほり北側

ひかし山の月花を

遠見

彫(頓カ)智 中村哥六

周防町

はでをこのむ

持衣装

今様 中村松江

三津寺丁

楽園で気性ハ

高二重

端手 藤川花友

とふし江戸

つねの気だてハ

江戸見へ

美景 嵐富三郎

南笠や丁

いつでもきれいな

人形ぶたい

花実 澤村國太郎

玉や丁

仕内ハしつとりとした

獨吟

閑情 嵐かなふ

南笠や丁

どふやら淋ふなる

本釣鐘

気性 市川門之助

市川同居

年圍りりかうに

廻り道具

深窓 片岡愛之助

片岡同居

お爺様をこわがる

奥屏口

利發 嵐璃光

三津寺丁

人のしなんを見て

シヤギリ

目アリ

一入(白ヌキ) 澤村璃苔

なんち

愛敬 浅尾徳三郎

宗右衛門丁

追号 可眠子

小六同居

同 中山みよし

太左衛門はし

同 中山恣代

三津寺丁

同 浅尾吉三郎

工左衛門同居

同 浅尾かなめ

勇次郎同居

孝行

片岡恣江

高津しんち

大坂の末々までも

触紙

洒落 尾上多見之助

同 荻野にしき

同 嵐源之助

▲花車道外之部

器用 澤村徳三郎

南たまや丁

追号 中山岩次郎

▲〔頭〕取之部

勤仕 柴崎臺蔵

竹田まへ

篤実 桐の谷権十郎

坂丁

俠氣 坂東國右衛門

南たまや丁

▲狂言作者之部

金澤龍玉

川井良助

金澤芝助

澤嵐納老

並木重蔵

奈河晴助

近衞恒助

奈河卯十郎

並木半蔵

濱衞氏助

奈河一洗

▲惣巻軸

豪傑 中村歌右衛門

南笠屋町

ひしきばいごる

町触太鞍

正風 嵐吉三郎

ほてい丁

仕打も氣質もすぐる

花道

千穂萬歳楽

ちよつと御断申上升濱芝居出勤なから此處で評いたし升る

ほうひ

孝行 百村紋九郎

高津しんち

此お人西高津新地九丁目大野屋善右衛門借家高津屋多七同居去卯

三十六才

祖由 妙清

去卯百二才

手當圓として米十俵被 下置候此よし御ふれ有 之候

開口

頭取

いつも様方お好乃道て早々乃御来駕、評判所の大慶いか斗りか難 有仕合。併今日の

評義は例年八文舎自笑とのゝ致さ圓升る三ヶ津惣役者藝品定と六圓替り、大坂住居の哥舞妓役

者衆中、平日乃氣質ニ風雅も有レハ血氣もあり。又見かけニ似合ぬ利屈嗅きもあれば、護戸の牛

王なもある。其氣にころの評判てムり升から、さ様三思召被^レ下升ふ。^{〔コリヤ〕}コリヤ珍しむ評判て面白からふ。^{〔芝イ好〕}夫ならは巻頭のせり合、ヒイキくの力味も出来マイ。^{〔頭取〕}サア夫故立役、敵やく、若女形と部を分まして、大低役者衆中の烈に評致升ふ。^{〔皆々〕}惣巻頭ハ誰じやく。^{〔〕}

▲惣巻頭

大丈夫 國 片岡仁左衛門

^{〔ヒイキ〕}ヤレ我童さま、とふしても三ヶ津で役者の親玉座頭とハ折紙付キじや。早ふ評か聞たいく。

^{〔頭取〕}當時大哥舞妓にて座頭と人の赦せし大建物ハ此お人、浅尾国五郎と申せし敵やくより段々旧功をつミ、片岡仁左衛門といふ名ハ「役」者道にてハ急度した代々の「銘」家。^{〔芝イ好〕}ヲツ

ト其系凶家すじハ、頭「取」がひろふせいでもよふしつて居る。何角ハさておき當時の我童丈の氣質乃評はどふじやナ。^{〔頭取〕}なるほと系凶ハ勿論藝道の評ハ、本家人文舎の品定ニ差かまひ升れハ、

則樂屋の評にかゝり升ふ。^{〔女中連〕}わたしやはよふりくわん様の評義か聞たいわいなア。^{〔頭取〕}

東西く、各々さまがたの聞たがらるゝ「花」かたを待かねさせ^{マス}舂ルが評判所の固密と申もてムり升る。^{〔女中連〕}エゝ氣のわるゐしんきな仕方しやないかいな。^{〔頭取〕}扱まついづれの役者衆中で

も内乃いやミハ大低同しおもむきにて、建者衆乃内のかまへ、寢所ハ何處でも中ニ階がお定り、繻子物乃類ひ乃衣装の古で拵た小夜着、蒲團乃うへに、さなから大名高位乃心持にて、また一睡乃夢も覚やらぬうち、芝居にハ戎太鞍も打切、三番嫂もすミ、エイヤヲ「おうと忝番目がモウ詰り升ると中働きが知らせに戻ると、内義か下女か其よしをいひつぐと、そろくと起上れハ、びろうどうにて是も衣装乃古て拵へた丹前姿、細帯乃俣にて、手水乃湯を汲せり。はんぞう、鵜飼茶碗、ゆつぎにを（もカ）其家々に紋所いかめしく舌かき磨き、楊枝一ツく、お傍つかへの秘といへばしほらしけれど、摺圍らしの下女がいやミ歌、又は當時乃流行哥などを口癖乃やうに諷ひながら、いとのおさくくと立廻り手水も済と、其むかし嵐三右衛門時代には諸見物乃悦んだ丹前六法乃所作ならて、内着乃丹前姿にて六法よりも四方八方乃神仏を拜ミ廻ス。是さへ役者乃評儀と同じ事にて時々乃きゝ物あり。先當代にてハ法善寺乃金びら、自安寺乃妙見、高津乃宮の高倉稻荷大國神、ゆうが大権現ハ幸町乃方を遙拜し、持仏でハ其宗旨く、の念仏題目多くハ法花宗の坐藏がち也。此拜礼か済だと朝御膳、木具乃うへに錦手乃茶碗、定紋乃付た朱塗の箸箱ハ、お定りの名護屋ミやげのふち金乃黒塗乃脇とり盆に、新渡り乃躰もの②順慶町の座禅豆屋ほど並へたてく、近習が廣ぶた、藁の物持て出るといふ身構にて給仕もすむと、樂屋入のきもの、羽折かう

とう端手ハ銘々の氣ニなれハ、其所々で評いたし升ふ。

粹かり カノ月花餘情に陽臺乃妓婦送り

退クならず、駕に氣すと記セしこと大建もの役者ハ、樂家の往来を駕籠でせらるゝが、宮芝居乃チンコ役者、ヒフカ引廻しか、長合羽か何じややら分らぬ物着て行跡から、「履」物提て風呂敷包背負た母親か付て行ほどしみたれた物ハないわい。

頭取 東西く、今日ハ大哥舞妓乃評義で

ムリ升れハ、中芝居、ミやしばゐ、あやつり芝居、座しき芝居、旅芝居などの品定ハ、又々近日相催し升るから、今日ハけつして御無用でムリ升。

ミなく サア松嶋屋乃評いどふだく。**頭取**

我童丈ハ日頃大聖觀喜天を信仰ふかく、家内には聖天さま乃一間あつ圍穢れ不淨の輩入へからづと、禁制乃札を出し莊嚴、まわりには金銀七宝をちりばめ、誠に金銀にあかした其結講サ。

ヲダテ 御拝礼が済ましたら靈宝ハ左りへ。**芝い好** エ、評判乃懸りから茶にせまる。時々頭取へ

一不審もつて参らふ。聖天さまを信仰すると女子の傍へも寄らぬといふに、(3)我童丈ハ水上を百人する願か有とやら聞たが。**立花組** 岡嶋屋ハものかたふてそんな事ハ多らい嫌ひじや。

羈組 其替り毎晩乃大酒に夜明しをせらるゝゆへ、自然と芝居の始りが遅ふなる。こちらの玉ハ其段かえらい物じや。第一狂言乃けいこが早ふて、初日が早ふて、朝乃初りが早ふて、幕が早ふて。

わる口 ヲツト待たり。其替り氣がはよふて、時々狂言方や後見にこぶしの一ツも當らるゝハ困たものじや。**立花組** イヤ又岡嶋屋に其様なことハとんない。**頭取** 其争ひハおまちなされませ。

璃寛丈ハ大立ものゝおくりやう、芝翫丈にハ少々若輩ないやミも交るやうに見え升れど、元来ぶたひを大事と車輪で勤めらるゝ故、自然と氣が早ふ成升。**儒者** いかさまナア。是か所謂智者の一矢と申のでかなムらふ。

片岡ヒイキ コレく羈や立はな乃評ハあとへまわし、圍ア巻頭の我童丈の細評か聞たい。**頭取** 杵嶋屋ハ最早六十四五才なれと、元来氣質に端手なる所あつて、めいらぬ所がかふきの大建物、夫故大丈夫といふ位を付ました。

南より (4)去年天王寺乃開帳にハ、杵嶋屋子供中といふ上ケもの段々とはづミ出した。是等も皆我童丈か陽氣ナからじや。

えびヒイキ イヤ蝶々のうかれハ播磨屋がゑらかつた。**市紅ヒイキ** イヤく三河屋乃天王寺蕪の趣向が當つた。**ハル口** ヲ、大根でなふてよかつた。**南** 杵江丈、哥六丈、其外女形の世話人が

奇麗ニ有た。**頭取** 其節ハ大阪中か大うかれ、殊に樂屋内からの上ケものにハ町々からの見物群集ゆへ、百倍乃陽氣か出来るが芝居の花というもの。併シ若大夫から出た馬の上ケ物、是かおとなしうて能ムリ升たれども、陽氣は役者の愛といふもの、扱また我童丈が全躰乃氣質ハ大丈夫

といふ待めた氣質有て、折紙付の銘の物こしらへよりハわざ物を数腰所持致さるゝとの事、其外宣徳乃火鉢にともし燭臺、或ハ金屏風、名画のかけものゝ類ひハ、北辺の曆々乃大家も及ハす。勿

論ぶたいの衣装ハ、毎年の土用ぼしに、よしの立圍の花紅葉を一同に見する心地がせられ升。

樂やシリ 分限者といハ大建物乃座がしら故、大王と呼升れど扱々若々しい事しや。**名古やレン**

しかし手前乃国から帰るゝ節に、入歯はつして只乃親仁と見せられた所へ、さしもの道中働ク雲すけも我童丈とハ知らなんだ。〔南より〕片岡せいはい乃〔青海波〕揃を着た男さへ付て居ねへ、めつたにそこらハさすもの「じやない」。〔頭取〕元来神仏を尊ミ、京都鳥辺山乃妙見へ石とろうろ、和州信貴乃毘沙門さまへの音進もの、近々四天王寺乃西門乃焼香爐、施主花徳七代片岡仁左衛門(5)妻今女と鑄付しハ、ちとおこかましけれども、香爐ハ立派ナ事、其外處々乃神社仏前へ奉納は数しれず。〔わる口〕しかし年中の大吉日と大悪日の圍んば、ほんに龜屋左京もあきれかえる。

其うへ役者乃内に死るといふ事をいわさぬとハ、きつい護片乃牛王ナことじやないか。〔バイテング〕

イヤく(6)江戸乃市川海老蔵は、ぶたいで殺さるゝ仕組さへ嫌ひにて、柏筵が大坂で成神乃狂言にも、殺さるゝ所ハ自身勤めなんだといふ事さへある。爺さんが首落されたら嬢が飯焚ふかといふた古イ咄し、このやふな事ばかりハなる。役者乃「内」でも死る事ハきらふはずじや、寺方の門にさへ立春大吉なと、目出たくつくしで祝ふじやないか。〔頭取〕成ほど仰の通り。とかく祝ふに恐ノ相ハない。夫ゆへ忝嶋屋乃繁昌といひ、殊ニ御子息嶋忝丈行末ハ大建者と見へすいてある。誠や梅檀の二葉。〔南左〕又そのうへに目出たいハ、堺屋力忝同居(7)かぶき役者片岡杏江、「所ハ西高津

新地三町目小嶋屋専助かしや、此人孝心によつてほうびとして鳥目三貫文 御上より被」下るとハ、其身の誉といひ、師匠乃大慶でハないか。〔老人〕(8)去冬ハ百村紋九郎ほうびを戴かれ、役者衆に孝行ものと家持がたんと出来るとハ有かたい事じや。〔皆く〕この跡ハ誰の評じや早ふ聞たい

く。〔頭取〕これ圍りハ立役衆中の内證乃咄しにかゝり升ふ。

▲立役之部

勇氣 團 市川鰻十郎

〔新丁ヒイキ〕ヤレ待て居ました。播万屋の親方。〔頭取〕市川系ハ申さすとも、各様方によく御存、

元来新町の廓中にて出生いたされ、幼少より役者道が好故に、終にハ故市川市紅丈の門弟と成り。〔芝いスキ〕いなり座摩の子ども芝居て修行の功か積で有ゆへ、中々素人の子とハ見へぬぞ。

〔八まき箱中〕ソリヤ目徳でも同じ事で、伏見堀羽子板橋で素人の子でも、當地若大夫の芝居では花かた、谷村も三津五郎も閉口さして居るハい。〔新丁〕ソリヤ好こそものゝ上手なれば、其うへ親

達が身躰有だけ物を入、張こまれたゆへ、とぶく大かぶきの大建ものに成られた。元来たくましい気性ゆへ「男立も致され、またいやな事はいやじやといひ切て仕まふさつぱりとした行」ミ、夫ゆへ勇氣と言位を付たのじやナア。〔市紅ヒイキ〕サア其勇氣が有ゆへ、師匠の息子今の團蔵丈とハ

時々喧嘩か出来、前かたハ市ノ川と市川の中へかた仮名のノの字を入れて、紋も〔図〕三ツ舛に一文字を引た事もあつた。〔江戸左〕いまの市川はお江戸のこつばう親玉團十郎から譲り受、鰻十郎と

改名して三舛の舛の字ももらひ、俳名新升と改めた時、市河家の柿の素袍大小などを譲りうけ、今の市紅と八師弟の系八切て有る。南より それも昨年故人團藏十三回忌につき、市紅が三代目の團藏と改名の節、角の芝居の棟梁角兵衛とのゝあいさつで、鰻十郎丈との中も直り一座しられた。楽やてんぐ しかしひらかなの役をめで、言分をしたとやら叩き合たとやら。ヒイキ サアそこが勇氣といふものじや。ソリヤ喧嘩にかけたらし紅ハたまりごたハ有マイ。頭取 さ様なる中違との出来ますにも、まんさら其謂れなきにもあらずでムリ升。(9)師匠乃團藏丈病気のミギリ、今の市紅丈ハ江戸表に居られ升たゆへ、葬式諸事残らず新升丈が致され、其うへに千日の竹林寺にりつばな石塔」を建られ法名釈了西と彫付ケ師恩を報じられた。物しり しかし辞世の哥に

けふもゆめ 寝ても起ても夢のゆめ 夢にゆめ見る夢の世の中

と能筆て書てあれど、夢といふ字が昔に成て有ハ多らい昔ナア。市紅ヒイキ 市紅丈か建られた

遊行寺の石碑にハそんな昔ハないわい。南々 さ様な書損位を頓着せぬ氣質故、余りいやミのゆ

すりもなく、適々自画の鰻の墨画ニ讚した扇が関の山にて、毎朝焼とうふ屋を喰て運を強ふし、

とふく座がしら株に成られた。嶋の内花車 息子とのゝ助蔵さんもいつぞやから市蔵と改名し

て、此頃見れハ早元服がよふ似合、姉さんの小富さんも大清から出て、是も鉄嬢つけも濟で目出たい盡しじやハイナア。

古風 中山新九郎

頭取 喜樂丈ハ中山新七と申せしむかしより、狂言乃仕打ハ内(ママ)論、地、行状も古風にて、俳優家の名家中山家元和泉屋の家屋敷から美艷香の仕にせ迄譲り受られた。役者道の大慶と「いひ、仕合な義でハムリ升ぬか。近辺より 大晦日にハ、美艷香ばかりが百貫乃余もうれるとハけつ

こうな事じや。頭取 子息一蝶丈も當時かぶぎの中立もの、追々昇進てムリ舛ふ。

當世 嵐三五郎

京ヒイキ ヤレ京屋の親玉まつております。わる口 なんほまつてムツてもモウ今でハ濱芝居の役者

の中へ這入り、たとへ座かしら被^レ成ても威勢が薄ふ成たやうに見へるわい。濱の見物 あわの若おし

沢山さふ三、目とくや百太郎 鬻助の勢ひニハ今のかぶき役者が叶ふ物かい。友右衛門大せい 引

すり出してなくれく。頭取 とふざいく、さ様にあらしくしき事を仰られ升と、どふしても濱

芝居の見物ハ立テばかりを嬉しがつて、評判ところの行義をしらぬかと思われさつしやるも気乃どく、マアとつくりと気を慎めて頭取の評を御聞被^レ成ませ。見巧者 イヤモ奥聞ふより口聞

と、来芝丈に當世といふ位を付られたハ、とかく當世ハ名を取ふよりとくをとれの世界じや。大
まいの前金取て、正月の給金もかぶきへ出勤並ニとり、また其上に二月の手つけ迄もたつふりとと
られたとのうわき、濱芝居の事なら定而蔵衣装にて有ふし、夫なれハ裸でものおとしたためしがな
いと言物じや。〔ハルロ〕イヤ又来芝いつでも同じ衣装、かぶきをつとめても衣装を切て出たるハ
見た事がない。〔京ヒイキ〕サアそれも親来芝の衣装が沢山に有ゆへの事じや。〔ヲダテ〕ソレガやは
り京こんじようさ、来芝が濱へおりたくと惣嫁でも買ふたじや有まいし、角乃芝居の釣看板見
たがよい。米ふんで居た芝翫でさへ下へおりたじやないか。〔靄組〕何ぬかすじや。あれハ細工人の
わざしや。そこでぬからぬ〔靄凶〕の親玉、じきに米をさし上げて居る所二人形ぶりをかえた處が、
筑前米が違もの二なつたトゆふて、堂嶋乃仕内かゝりの人々がよろこんだ。なんと氣どりハ多らい
か。アゝつがも子エ。〔頭取〕ヲツト来芝丈は嵐松之助と申せし若年の頃、しばらく役者止めて小
間もの屋にもなりたり。又貸本屋も致されたとの事、夫故外の役者衆中と違ひ世事にかしこく
樂屋でも役者同士のすれもつれのあいさつ、又ハ勘定場の渡り引の應對納らぬ役も納めたり。頭
取役やら手代やら、作者の替りにまではしり歩いて、ほんにやれくく、あし豆なお人。〔おたて〕ソ
りや「足まめな筈じや。(10)一本足乃景事で當つたもの。〔南〆〕また人のしらぬ足もまめなやら、
南枝香乃後家御と何やら。〔頭取〕イヤモさ様な事迄評いたし升ふなら際限ハムり升ぬ。とかく
来芝丈は振付が御上手ゆへ、身の取廻りも利口に立廻り、夫ゆへの(11)大西出勤。是からハ濱芝居
も行儀正敷相成升ればやはり大慶、殊ニ當春へけいせい品評林の狂言も評判よく、大當りにてお
手からく。

天然 團 市河團藏

〔ヒイキ〕ヤレまつて居たく。三河屋の若旦那、早ふ評を聞しておくれ。〔芝い好〕市紅丈に天然と
いふ位を付たハどふした事じや。〔頭取〕サレバ天然自然と申事か有て、故市紅丈の御子息にて、
團三郎と申た子役の砌ハ末頼母しき狂言の仕内でムり升たれど、成長乃後とふか暫評も薄く、
若大夫へ出勤致された事も有たれと、サア爰か天然自然と申ものにて、名人の胤といひ、子役の
時の小賢しき氣質頭れ、とふく立ものと成られ升た。〔南〆〕大立ものゝ名家故内の行義も正
しく、いつとても羽折きて座ふとんの上に座し、青貝入の机の「上に書物を置ならへ、孔雀の尾乃
大ゆすり、平日碁かお好にて盤上のお樂しミ。〔朝顔好〕(12)あさかほもおすきて能穆も所持致さ
るゝとの事、喜樂丈や百花丈も朝顔ハつくられても、俳優家では奥山丈に續たら市紅丈じや。
〔俳人〕朝顔を愛せらるゝから、ふう雅ナ所も有やうなれど、去年亡父十三回忌乃摺もの、自らハ
市川團藏と改名の事ゆへ兎も角も、追加乃人々ハ諸人の知た俳名乃ある役者衆中なるに、片岡

仁左衛門じやの、中村哥右衛門などゝ記されたハ何の為の俳名じや、扇面などに自筆の讚を望まれ、又ハケ様ナ摺ものゝ節俳名を用ひべきに、表つきをいだされしハ、扱々不風雅でムル。**頭取** イヤモ當世は俳名を表つけにした役者衆中が多ク出来、そこらとんじやくハせぬ所がけつく風雅なよふに成升た。何はしかれ小がらでも大立もの乃氣質頭れお手からく。

余風 國 坂東重太郎

濱見物 ヤレ坂東待て居た。こちのく。**かふき見物** イヤ重太郎をこち乃くと、濱芝居の役者じやと思ふて居るか。其むかしハ大哥舞妓の座本も「つとめられ、第一かぶき乃名家岩子丈乃御子息にて、父御乃敵やくハ被」成す、若衆がたよりやつし役と成、中頃時めきし中山文七丈鬢附やくくと諸見物乃悦んだ藝ふうヲのミ込ミ、また當世乃きゝもの岡嶋屋丈の狂言ならムれく、持て来いじや。**頭取** サア夫ゆへ余風と申位を付ました。ぶたいハ女中の悦ぶ花ある狂言なれども、地乃趣ハかうとうにて、楽屋入の衣装もじやが、嶋の對イ返し、小紋の對といふやうな着つけはおり、舞臺乃狂言よりは上品ニ見へ升る。

為功 國 中山文七

頭取 百花丈は兵太郎と申た時方やつし役がお家乃藝にて、俳優乃名家乃名苗氏を受継、中頃ハ江戸表乃大立もの瀬川路考丈乃相手と成られしかと、當時にては小さまと殺され婆々役は外二類ハムリ升ぬか、やつぱり持まへのやつしハ又々格別な所がムリ升故、こなしといふ位を付ました。**有難や** 百花丈ハこち乃お宗旨と同じ事て殊ニ大の有がたや、先年御門跡さまの御下りのせつも御礼金を沢山に上られ、扱もく殊勝ナ事。「そふゆふころゆへ、黒谷乃浄光どのゝさしずつも、和泉屋に所持の御前さま、けつこうな仏壇をゆずり受られ、扱々有がたひことじや。

ハル口 その有がたやに似合ぬ大の殺生好き、はぜ釣りムれ、網ムれ、沖釣にも度々行るゝ故、日和の善悪を見る事は、大かいな船頭も及ハぬく。有難や乃殺生ハ、是かほんまに魚ハ喰れて成佛するといふ所か知らぬ。**物しり** 御出生はおはり名古屋乃矢場町紅屋とうけ給りました。

律儀 國 嵐猪三郎

橋組 兄さまの評から聞たい。待ていたく。**南** 環子丈の律義ハ誰てもよふ知つて居る。**頭取** それ故律義といふ位を付ました。此お人若輩乃砌ハ近江芝居にて修行致され、初代尾上新七丈養子と成られし事も有たとの事。常に不動明王と楠正成、天山老人が信仰にて、左専堂の不動ハ月参り致され、田上ノ不動、其外近在の不動廻り、又ハ楠乃旧跡を尋んと河内の國に遊び、

天山老人の弟子ごふんとなりて名を地山と呼び、太平記ハ勿論、義心傳、先代萩の講釈が得手にて、ときく座敷かう尺をして、人の耳を悦ハせられ升。」**南** イヤ又講尺斗りじやない、上るり乃會を催し、連中ハ英子丈 璃光丈などにて、勿論上るりハ中大夫どのとハ兄弟の事也。

上ルリスキ 上るりよりハ三四郎の方がよいと、三味せんでハ甚大くと声がり升。**頭取** 其うへ

上るりの故実あやつりの事に委しく、是等の咄しをせらるゝがお上手。**ハル** 外の事を藝と替

たらよからふ。**頭取** コレハどふした事でムリ升ス。此所の評判に狂言乃よしあしハ御用捨でムリ

升ス。**南** 述懐さんといふわけ意見ハとふした事じやしらぬが、猩々といふ異名の訳ハおかし

じやないか。**女中連** りくわんさんと違ひ其様ニさゝハ上らぬに、猩々とハどふした事じや。

頭取 **図** ソリヤ弟付じやといふ事じや。ハハハハハ。

奇麗 **図** 小川吉太郎

ヒイキ 英子さまく早ふ評が聞たいく。**頭取** 英子丈は芝翫丈の伯父御東齋との、初めハ源藏

と申せし人乃養子にて、生得やつし方の器量故、小川吉太郎といふ名跡をつがれ申た。それゆへ

奇麗と申位にて、御子息栄次郎丈も、當春座万の社内口の芝居にて「他門ませずの中村一統、

玉の助、駒之助両人の戻り駕に、栄二郎丈禿の役、すつぼりかつらにておつとめ可愛らしうムリ

升タ。**南** 狂哥も出来る上ルりもやらるゝ、小川丈ハ御きやうはだ。**わる** でも上るりハ声

がかひなふて聞にくい。**ヒイキ** 暮もおすき、其うへに天山老人乃講尺がきついお好にて、近辺に

席が有ていつもおこし。**講尺スキ** ソリヤ嵐猪三にすゝめられ、百花丈もけだいなふ聞に行るゝ。

頭取 なにハしかれ、やつしやくのきつすい、追々御出世でござり升。

若半 **図** 中山一蝶

仲い連 一蝶さん待かねて居るわいなア。**坂丁連** 岡嶋屋うつしに座敷の遊びをせらるゝ。**ヒイキ**

うかれ好で座敷が面白事じや。**頭取** 来太郎と申た節より、きつと若手乃花かたと見え追々

に御出世でムリ申ふ。**ハル** しかししばらく若大夫ハ出勤にて、和泉屋乃名家ハ濱芝居の太鼓

を打込だハ、マアおいらハ不承知だ。**ヒイキ** なにぬかすやら、それもしゆぎやう乃うちじや。今

のまに大立者、岡嶋屋くといわして見せるわい。」

大様 **図** 中村歌七

鶴 **図** **ヒイキ** 哥七さまくこちのく。**頭取** 哥七丈は橋之助と申た頃方大手なる狂言故、大様

とつけました。**南** かつほくに似て(13)大の角低すきにて、毎年のすもふ大かた十日は欠されぬ。

〔角力好〕 奥山も猪三郎もえらひ好きじや。〔頭取〕 哥七丈ハ、先年御前丁にて江戸店を立派に出され、大キ成鏡臺に、芝翫丈の石橋の似顔店出しのせつハ、買人が群集いたしました。〔ヒイキ〕 哥七丈ハ大から故、ちよつとおもひ付ことが大きにて、見事な看板じや有た。〔近所〕 イヤ看板よりいびきの音が大きな内ニ寝てじや事ハ、近處によふ知れる。今ハ八幡すじかゝやのとなりへ変宅にて、いびきの音をたすかつた。

温和 國 三桝他人

〔頭取〕 他人丈ハ清兵衛丈の御子息にて、元来すなを成氣質故、見物の評ハ勿論、楽屋うちにても至極うけよく、夫ゆえ温和といふ位を付ました。〔芝い好〕 當春ハどふか江戸下りと聞ましたが、やはり京都にて二の替りも「御出勤」。〔京〕 他人丈ハ大坂より京のヒイキが多ひ。〔江戸〕 背もすらりと高くよいかつかう、江戸へ下られたら、近頃乃沢村宗十郎によく似て有から評判かよからうわい。

追号 富士枕山十郎

同 中山小三郎

同 市川市羆

同 大谷此友

同 嵐璃三郎

同 片岡十蔵

同 中山新平

同 嵐嶋三郎

同 市川濱蔵

同 三桝亀五郎

同 坂東荒五郎

同 小川又九郎

〔頭取〕 山十郎丈ハ折々の出勤、どふぞ打續出勤あらば其節細評いたし位付升ふ。小三郎丈も近年ハ打續ての出勤なく、どふぞ口乃内が直してあけたく、市羆丈の氣質ハおとなしく、此友丈は江戸表へ暫お下りで有たが、帰坂の後ハおとなしくなられ、璃三郎丈ハ新川く呼れてふるつわもの、十蔵丈ハ江戸表のふりつけの名人市山七蔵どの「子息」故、ふり附か御巧者、新平丈ハ九州地などの旅てハ、中山来助と呼むて大建もの、嶋三郎丈ハ其昔中山久吉といふた時ハ、子供芝居てハ

やつし役乃立もので有たれと、一兩年ハ東國へお越て住所もしかと存ぜず。濱蔵丈ハなんば新地法善寺の裏門にて中嶋屋と言呼屋、先年箕面乃弁天の富が當りし方追々繁昌、聖天さまの信心厚く日參致さるゝは奇どくナ事。

生玉より

南乃坊の聖天さまへ金壺両寄進とハきどくな事。

頭取 龜五郎丈ハすまふ場乃近辺て武蔵野御飯といふ料理屋、荒太(マ)郎丈ハ生玉馬場さきからとハ若けれども御苦勞なごと、又九郎丈ハ錦子丈乃弟子にて、笠や又九郎といゝしが、いつの程にか小川又九郎と改名致され。

芝い好

ヲット待たり。笠や又九郎といふハ名人の名苗氏じやに、

小川としられてハ唯の親仁じや。

はま見物

とふしてもほうだらといふながよふしれてよいわいな。

頭取 いづれも御出情のせつ位を付ませう。

▲実悪敵役之部

巧者 國 浅尾工左衛門

南 ヤレ金田屋の親仁さま。

三宝組

アこれく鬼丸さまを親仁くといふてじやけれど、我

童さんよりハ式ツ若ぬわいなア。

頭取

工左衛門丈ニ巧者の位を付たハ、藝道乃巧乃字ハ申迄も

なく、元来器用なる産れ付にて、小細工事などを巧者に致され升る故の位でムリ升。第一上根にて筆まめに書拔のせりふを直し、五音相通、アイウエヲカキケコノ詞つかひなどの吟味を致され、其うへに、芝居乃禁句入らぬわの、當らぬ、はやらぬ、つけるのといふ詞を嫌ひ、夫故入歯を大せつに致され升る。

楽ヤシリ

鬼丸丈の楽屋ハ自身が手まめに松葉紙にてはり廻し、とんとゆ

すイ事は嫌ひにて、發句の哥のなどいふよふな事を致された事ハなく、只いつ迎もまりし天乃御利生と、法花勸請のいなりさまの世話せらるゝ斗りじや。

南

内室のおまつさまハ、清兵衛さ

んの内のがきつゝ中よし、芝居の初日はいつでも欠さず見物じや。

芝い好

御子息吉三郎丈も

近頃まで江戸はら當てして門トに遊んでゝ有たのニ、去秋ハ額ニむらさきぼうし置て裾もつて、ちやんと「よひ女形ニ成られた。**ヒイキ** 元来器用な生れつきで、琴、三味線、上るり、三弦、つゞみ、太鞍でも達者ナ事じや。

頭取

舞は勿論乃ことにて、三番嫂にて當られ升た。鬼丸丈は、顔に

似合ぬ大の子可愛がりにて、弟子忒人も息才延命ナやうにとて、無事之助 丈夫郎と附られた。

芝翫連

其名の附親ハ芝翫丈じや。ほんに珍らしい名じやないか。

強氣 國 大谷友右衛門

頭取 金轡丈ハ実悪一道より脇道へゆかぬ氣質故、強氣といふ位をつけました。

芝い好

いつでも

狂言が車輪ゆへ、ビリくといふ異名。

南

岡しまや松嶋屋に續ての俳優中の金持じやとの事、

いか様そふかして土用干の衣装斗りてさへおびたゝる事。

刀屋

イヤ又妙ナ拵への腰の物を数多

所持してムリ升。**聞たかり** 妙なこし乃物とハとふした物じや。**刀屋** さればでムリ升。大谷氏の好にて鏝ハ勿論、ふちかしら、目貫、小づかに色々、或ハあみだ如来、千手観音、不動明王などの像を彫つけ、南無大師遍照金剛じやの、南無不可思議じやのといふ文字を彫付、勿論細工は「妙手」にかけ、金にあかした脇さしの所持ハ、杵嶋屋にも負ぬ位でムリ升。**南々** なんちの紫友香并**九十紋**香乃店も場所がら故繁昌と見へ升ル。

曰アリ

出情(白ヌキ) **閼** 嵐冠十郎

ほり江 慶舎さまく、近江さの、評から聞しておくれ。**頭取** 東西く、先程来芝丈評の節、南

枝香とやら何とやら、余所事の評も交りました故、其儀ハ決て御断申上升た。**南々** 慶舎さん

ハ杵嶋屋をいわすかたらずに真似して居てじややら、信貴山参りしたり、年中の大吉日大悪日乃吟味か六か敷事じや。**頭取** 慶舎丈は岡嶋屋の高弟でハムリ升レと、元来江戸表にて修行い

たされた身分故、江戸の気風が離れすふたいの衣装ハ勿論、平日の着もの羽折とても、大名旗本侍衆のごとく大きな紋をつけられ升。**楽やシリ** ソリヤ其はずじや、具足屋の内室ハ江戸て武

家の奥勤した女中とやらにて、縫針がえらいとの事。**近所々** 縫針もえらいが怪気する事もえ

らひ。**南々** 女夫ながら江戸気故、楽屋ハ権助が来たとしてこわがるものじや「ない」**楽やシリ** わ

やな江戸ツ子まかいハ慶舎に逢たら一たまりもない。**頭取** 慶舎丈ハ元来世話やきずきにて人の

難義も見捨ぬ気性、勿論師弟の礼を重んじ、朔日、十五日、廿八日の式日、初日寄初當り振舞などにハ、人一番に袴を付て親方くとと璃寛丈を尊ミ。**おたて** イヤ夫よりハ黒びろうどのヒフ着

て走り歩行、璃寛連、橘組、ほり江教経連中へのおつとめハ、藝者でも及ぬく。**芝い好** ふたいの

狂言方ハ地の咄しがきつゝる上手、其中に江戸表の大名旗元衆の家々乃格式などの故実をいわして聞ふなら、岡しま屋の長せりふ方面白い事じや。**見巧者** 時ニ頭取、慶舎丈の位に出情とつけ

たハ舞臺の狂言の車輪ナ所は勿論の事、連中方への折見合出情致さるゝといふころで有フが、日アリと記して情の字を蔭にして有のハ、余り世話やき事が過て、けつくいらくするやふに見へると

いふ事て有ふ。**頭取** 成ほど見巧者乃御連中とて其通りに違ひなし、しかし慶舎丈のごとく尻

軽にかけ廻り、ヒイキ連中を大勢にはならぬ事。**狂言方** 礼状を書いて呉の「見舞状かやりたいの

と頼まれるには困り升。**艸紙や** 其様に状を出さるゝ故、冠十郎丈も大坂の能筆の内に入られて有一枚摺がいつぞや出ました。**北より** とふか近頃ハ岡しま屋と一座せられぬゆへ、璃寛の機

嫌をそのふたなどいふ評も有ぞ。**頭取** なる程素人方にてハ、慶舎丈岡嶋や乃番故乃やうに

も思ふてムル方も多ひ故、久しう一座がムリ升ぬと機嫌でも損ねたといふ評の有も尤、しかし座

組八時の模様故、とかく師弟の礼義厚、出情の字を黒二被、成るやうが肝要く。

世話 團 浅尾國五郎

ヒイキ ヤレ近国さまく。 **頭取** ぶたいにわからぬ平日の行込ミ、近頃は頭取替りに我家内のお

世話やき、そこで世話といふ位を付けました。重宝ナお人でムリ升。

師風 團 浅尾為十郎

頭取 奥山丈ハ江戸表へ下られ、彼地にて師匠乃高名為十郎と改名有て、狂言の仕打ハ、故人為

十郎丈乃師風ある故、即位を師風と付ました。 **大坂ヒイキ** 去年の暮には芝翫丈と同道にて帰

坂と待て居たのに江戸ニおめて、マアしはらく顔が見られぬか。 **芝い好** 為十郎丈も早ふ戻りたい

といふていられるとの事じや。 **頭取** あさかほと角力好の事は、前て評もムリ升た故、猶細評ハ

帰坂乃節ゆるく致升ふ。

可笑 團 嵐團八

ヒイキ ヤレ岡むら屋待て居たく。 **頭取** 團八丈におかしミといふ位ヲつけましたハ、ふたるのも

やう。 **南々** 地でハふたるほどのおかしミハないぞ。 **冠十郎ヒイキ** 地は慶舎の方やつと面白ひ。

頭取 ソリヤ其はずじやムりましよ。役者衆が地もぶたいも同じ様に三枚目の敵役じやとて、内

で金を盗で花生へ隠しても置ず、さわぎ役も内でハ不理屈ナ事いふて、女房や中働きをこまらせ、

実悪じやとて、憎でらしる物でもないゆへ、團八丈が家内を笑してハ居られ升ぬ。 **楽やシリ** わら

わす所か酒のむと、チトねち上戸ゆへみなこまるとの事じや。 **頭取** 何はともあれぶたいに愛有

りて、見物乃悦ひ升ゆへ可笑とつけました。」

追号 團 片岡小六郎

頭取 小六郎丈は秋又の御子息にて、初は芝翫丈乃弟子なれと、當時は片岡氏の縁有て小六郎

と改名致され。 **ヒイキ** 芝翫と片岡の替り役なら生うつし、仕内を似せらるゝ所は奇妙じや。

南々 何と成と位か付てほしい。

追号 桐山紋治

同 坂東國五郎

同 片岡蝶十郎

同 桐寫儀左衛門

同 浅尾此兵衛

小川馬右衛門

嵐岡十郎

〔頭取〕 紋次丈ハ、其以前ハ藝者にて有しゆへ、ふたいに粹過た所もあれど、近頃ハ俳優はいかいも致され面白ひお人、国五郎丈ハねりも、素人芝居などに顔する事が上手との事、蝶十郎丈は末頼母敷よい氣質、儀左衛門丈も其昔瀧右衛門といふた時分ハ、チト人をこまらせたお人で有たか、今アわたのよふに成られ、此兵衛丈はふたいへ出ると目をふさゐで、両手をにぎりつめる癖が「出て、歩行ふうハ師匠鬼丸丈を似せられ、元来旅乃座がしらの氣質離れず。〔南々〕 新川で宝来屋といふ茶屋商賣が繁昌じや。馬右衛門丈は座广の前乃養詮丹の先生に似て有ぞ。〔頭取〕 岡十郎丈ハ部屋がしらす蔵丈乃息子にて、京へ芝居引こし乃節は、此お人か頭取やく御くろふく、何れも追々位を付ませう。〔皆々〕 是からが若女かたの評を早ふ聞たいく。

役者更紗目鏡 上巻畢

